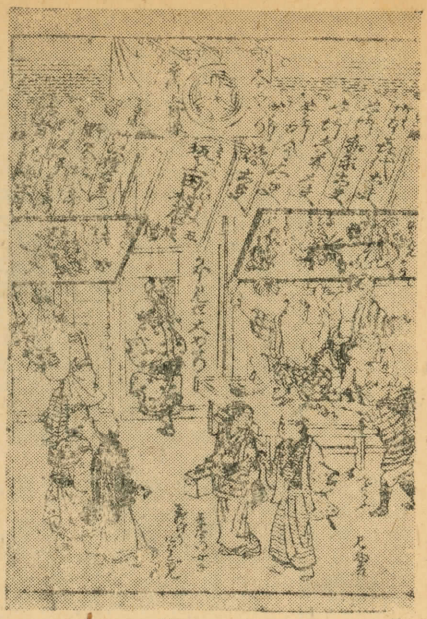
淨瑠璃覺書——（一）

祐田善雄



（第一圖）

從來、ともすれば、輕視され勝ちであつた淨瑠璃史を見直す時、竹本座や豐竹座、それに續く諸芝居の構造はもつと知られてよい。漠然と、淨瑠璃の芝居小屋は歌舞伎に準ずるものと考へるよりは、淨瑠璃芝居自らの畫證によつて訂すことが必要である。

淨瑠璃芝居の最盛期は、竹豐兩座が道頓堀の東西に覇を爭つて、新機軸を出さうと鎬を削つた頃である。太夫の語り風や三味線の手、人形の遣ひ方等に見る藝の目紛るしいばかりの進歩改善が次々と行はれてゐる時に、兩座の建築に逞しい意志が働いてゐたかどうか、よしんばさうした努力が認められないにしても、常識的に漠然と決めて掛るよりも、論據を持つて判定したい。

享保九年三月廿一日　竹本座類燒　豐竹座類燒
享保十八年六月三十日　竹本座類燒　豐竹座ノ表ハ類火ヲマヌガレ樂屋ノミ燒失　（第一圖）
元文三年四月八日　豐竹座改築
寶暦九年五月四日　竹本座類燒
寶暦十一年二月十四日　豐竹座燒失（出火トモ類燒トモイフ）　竹本座ハ類火ヲマヌガレ、竹田芝居ハ類燒、竹本座デ竹本・竹田打込芝居興行　（第二圖）
寶暦十三年正月九日　豐竹座類燒　（第三圖）

歷史の流を遡る時、ごく些らぬことでも、それを知つてゐることが、理會を歪めるよりは、むしろ、正しく導いてくれるやうな知識が、注意を引かないで流されてゐる事が間々ある。かゝる知識がいくら結集しても滔々たる奔流にはならないし、又流に浮ぶ好事的なものに心引かれ易いが、といつて、知らずにおいてよいわけのものではない。淨瑠璃史を省みて、氣付いたもの二三を書いてみる。

（一）竹豐兩座の外觀

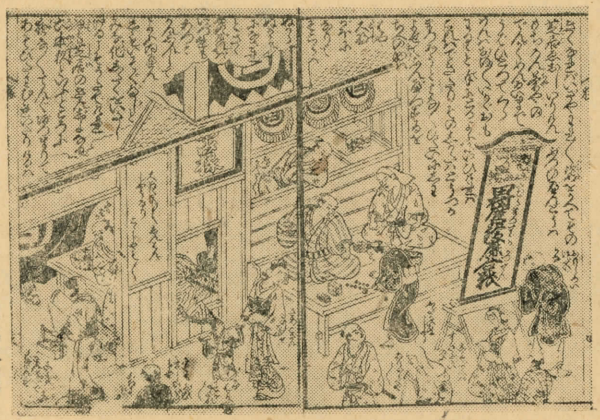
小屋の建築樣式を新しく改めるとしたら、火災による新築の際か、その構造を改築する必要に迫られた時に實施してゐる筈である。

僅々四五十年の間に兩座の烏有に歸すること三回、如何に芝居經營が難しかつたかゞ想像出來るし、兩座の沒落を早めた一つの原因も火災にあつた。

この罹災年表を通觀して、兩座の外觀を見る爲に三つの畫證を選んだ。享保九年以前の豐竹座を示す第一圖（坂上田村麿）、それに續いて寶暦十一年までの豐竹座による第二圖（田村麿鈴鹿合戰）、寶暦十三年以後の竹本座の第三圖（竹本竹田打込芝居）を併せ見ると、大略兩座の爭覇時代の外觀を通觀出來るやうに思ふ。繪を見ながら氣付いた點を述べる。

第一圖　坂上田村麿、享保六年顏見合せ（招看板による推定）、豐竹座、繪盡（東京大學所藏）の中より

櫓で知れるが、豐竹座上野少掾時代の豐竹座の外觀である。顏見世も賑々しく招看板がずらりと並んでゐる。太夫、三味線より作者に及んでゐるにも拘らず、人形遣の名が見えない事は寂しいが、これにはそれだけの理由があるのだらうか。その中央、櫓の下、古く言へば物眞似札を揭げる場所に外題看板が筆太に上げてある。通常、外題をこんな所に出さないから、繪空事と言へばそれまでだが、注意してみたく



（第二圖）

なる。その下が鼠木戸で「かほみせ大あたり」と記してゐるのは景氣がよい。その左右、招看板の下に繪看板（段書看板に當るものが）あつて、顏見世らしく、華やかに人氣を煽つてゐる。向つて右、二段目國高最期の繪の裏は、第二圖、第三圖を比較すると、勘定場が設置されてゐるべき場所であるが、享保六年に既に設けられてゐたかどうか。その前の床几で入場札を賣つてゐるのは鼠木戸から入る客のであらう。向つて左の繪看板は五段目組打の繪であるが、その下に大木戸がある。提重箱に煙草盆を持つて芝居茶屋の女が見物客を案内してゐるが、こゝから出入するのであらう。

これが享保九年三月廿一日竹豐兩座が灰燼になる以前の芝居であつて「心中二枚繪草紙」（寶永三年）の繪入本（近松全集所收）に見る竹本座の外觀と見較べると興味深い。

第二圖　田村麿鈴鹿合戰、寛保元年九月豐竹座「御伽三笑子點頭」（京都大學所藏）の中より

寛保元年の豐竹座外觀であるが、享保九年より寶暦十一年までの豐竹座を略々現はしてゐるものと考へてよい。享保十八年には類火に遭つてゐるが、芝居表は助かつてゐるし、元文三年に改築を行つたが、これによつて外觀を變へたとは思へない。第一圖と比較し

て、掾號が變つた如く、櫓の紋も違つてゐる事に注意されたい。

表に張出されて華やかになつた外題看板は、又一枚看板とも言つて、外題の上に繪があつて立派に裝はれるやうになつた。鼠木戸の上に「越前少掾」と書いた看板を掲げてゐる。勘定場が設けられ、第一圖同樣、前の床几で入場札を賣つてゐるが、大木戸には豐竹座の紋を染込んだ暖簾を懸けて木戸番が居る。「かいはんさんまいでござんす」と、煙草盆と半疊を持つた茶屋女が案内すると、「たかばか」と應へてゐるのは、鼠木戸より高級の客筋を示してゐる。顏見世と違ふから招看板はないが、他の二畫證には繪看板が見えるのに、これのみは缺いてゐる。

「竹豐故事」（寶曆九年刊）の兩座の外觀と較べると、興味をそそる。

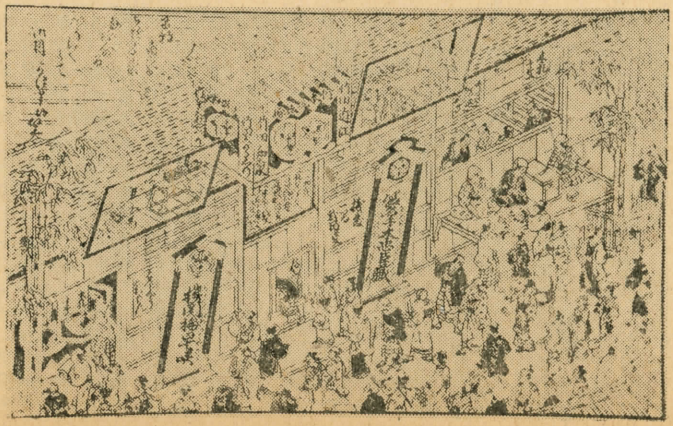
第三圖　竹本竹田打込芝居、寶曆十三年正月　竹本座（番附による）

竹本座の外觀であるが、竹本あやつりの本興行ではない。寶曆十一年暮、雪月花の宴に贅を盡してお咎めを蒙つた竹田近江が、赦免になつて、これから芽を出さうとする寶曆十三年正月、その根城と賴む竹田芝居が類燒の厄に遭つた。急場を凌ぐ爲に、竹本座を借り、竹本あやつりは「忠臣藏」、竹田からくりは「機關梅早咲」と「友全染」、子供狂言の「奧州安達原」の外題で、あやつりとからくりの打込芝居を興行した。この際の竹本座の光景である。

芝居の左右に植ゑてある二本竹は、竹田からくりの表象で、古い傳統を示してゐる。毎日早朝百人をぼうらくにしてゐる事や「札せん十文、さじきおいこみ五文、棧敷一間二百廿文、半疊二文」の値段書も、竹本竹田打込の格下興行であるのと急場凌ぎの非常手段である事を考慮に入れておく必要がある。繪看板も外題看板も竹本竹田に振り割つてゐる。櫓の紋は竹本竹田の抱合せであるが、竹田の紋が第一圖の豐竹座の紋の同じ事は注意しておいてよい。

以上三圖について述べたが、兩座の外觀に小異はあるにしても、興行に及ぼすと考へられる本質的な改革が斷行された形跡はない。むしろ歌舞伎の表をそのまゝ踏襲してゐて、あやつり芝居獨特のものに高めようとする努力が拂はれてゐなかつたのは、技藝の素晴しい進歩や舞臺に試みられた改革に比して寂しいが、一面その必要がなかつた爲とも考へられる。

芝居の外觀に大きな變化を認め得ない事は、芝居の大きさにも當嵌ると思ふが、京都宇治嘉太夫芝居は表口八間三尺、裏行二十二間三尺であるから、大體この位があやつり芝居の大きさと考へてよからう。（續く）



（第三圖）